

法学部 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時00分まで(90分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に6ページあり、解答用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問 以下の課題文を読み、問題1と問題2に答えなさい。

私たちは、選挙を通じて政府を選ぶ。政党が政策の争点や候補者を示し、私たちは投票し、選挙制度に従って票がカウントされ、勝者は公職につき、敗者は負けを認める。ときにはこのように機能しないこともあるが、ほとんどがこのプロセスを進^{など}める。選挙で勝った政党は、数年のあいだ政権の舵^{かじ}取りをし、その後、同じ政党を再選させるか、あるいは別のものに代えるかどうかを決める機会がくる。多くの人はこの一連の流れを当然のことと考えている。

しかし、よく考えてみると、選挙は不思議なものである。典型的な選挙では、有権者の約半数は敗れた候補に投票している。過半数の得票を得て当選する大統領はめったにおらず、また多党制のもとでの議会選挙では、最大政党の得票が40%を超えることはめったにない。さらに、多くの人は当選した政治家に期待を裏切られている。要するに、私たちのほとんどは、選挙の結果、あるいは、自分が票を投じた政治家の仕事に失望しているといえる。しかし、選挙の後ではいつも、支持する候補が次の選挙では勝って期待を裏切らない働きをしてくれる、と期待する。期待と失望、失望と期待の繰り返し。何かが変だ。唯一の似たような設定として私が思いつくのは、スポーツだ。私の応援するサッカーチームのアーセナルは、イングランドのプレミアリーグで長年チャンピオンになっていないが、新しいシーズンが来るたびに私は勝利を期待する。私たちは、人生に関する多くのことがらについては過去の経験をもとに期待値を調整しているが、選挙についてはそうではない。選挙には、あらがえない魅力がある。これは非合理的なのだろうか。

統治者を選ぶメカニズムとしての選挙には価値があるのかが、最近論争になっている。民主主義国の多くでは、選挙は「特権階級」、「エリート」、または、「世襲上流階級（カースト）」の支配を永続させるだけだと多くの人が感じている。また一方で、「ポピュリスト」政党や、排外主義や人種差別を掲げる政党が台頭していることを脅威と感じている人も多くいる。このような展開は、社会の深い分裂、つまり「分極化」を引き起こしており、何人もの専門家がこれを「民主主義の危機」として、または少なくとも選挙そのものに対する人びとの不満の表われと解釈している。最近の世論調査によると、民主的に統治されている国に住むことは「本質的に重要」ではない

と答える人が以前よりも多くなっており、とくに若年層にそれが顕著である。これらの結果を、民主主義が危機に瀕している裏づけであると主張する専門家もいる。

しかし、ドナルド・トランプの当選や、ヨーロッパにおける反エリート政党の台頭は、何ら「非民主的」ではない。また、イギリスの EU 離脱やイタリアの憲法改革などの、国民投票の結果を非民主的だと主張することは、私にはさらに奇異に感じられる。なぜなら、国民投票は「直接民主主義」の手段であり、代議制民主主義よりも優れているとみなす人もいるからだ。さらに、一部の政治勢力を非難するにあたって「ファシスト」のラベルを不用意に用いるのも適切ではない。1930 年代のファシスト政党とは異なり、これらの政党は政権の座につく者を、選挙以外の方法で選ぶことを主張してはいないからである。ほとんどの人は人種差別と排外主義を狭量であるとみなすので、これらの政党を狭量であるとのラベルを貼ることは可能であろう。しかし、これらの政党は、エリートが奪った権力を「人びと」に取り戻す、つまり、民主主義を強化するというスローガンのもとで選挙キャンペーンを展開している。トランプ陣営の言葉を借りれば、「私たちの運動とは、腐敗して機能不全を起こしているエリート政治を、あなた、つまりアメリカ人がコントロールする新しい政治に置き換えることなのだ」。また、マリーヌ・ル・ペンは、EU 離脱に関する国民投票の実施を約束した際に、「あなた、つまり、人びとが決める」のだと述べた。これらの政治家は、反民主主義者ではない。

選挙の結果に対する不満と、集団的意思決定のメカニズムとしての選挙そのものに対する不満とは、同じではない。たしかに、負ける側になるのは不愉快なものだ。民主主義への満足度は、敗者ではなく勝者に投票した人のほうが高いことは、研究により判明している。さらに、勝者に投票した人のほうが、選挙における複数の選択肢の存在を高く評価している。しかし、2001 年から 2006 年までのあいだに 38 カ国でおこなわれた 40 の世論調査の分析結果からわかっているのは、選挙で人びとがもっとも重視するのは、たとえ負ける側に終わったとしても、自らの意見を代表する政党に投票できることである。「特権階級」に反対する人びとにとって不満なのは、どの政党も彼らを代表していないことや、政権交代があっても生活には何ら変化がないことである。つまり、選挙が何も変えないということである。しかし、大多数の人は、選挙の結果が気に入らなくても、選挙のメカニズムそのものには価値を見いだしている。

誰がどのように統治するかを選択する方法として選挙を評価すべきであるとは、どのようなことなのだろうか。選挙の長所、短所、限界とは何だろうか。人びとが異なる関心と価値観を持っている社会では、㉔選挙を通じて合理性や「正義」を求めるのは無意味である。統治の状況に対する不満を最小限に抑えるよう私たちから政府に働きかけることが選挙の機能である、と私は考えている。政府がこれらの働きかけに「応答性」をもって従うかどうか、また、そうしない政府を排除するのに選挙が役立つか、つまり私たちが「アカウントビリティ」を行使できるかどうかは、より疑わしい。政府は選挙において有権者の審判を受けることにはなるが、能力がない場合でも責任逃れできる余地が大きいからである。また、選挙は、経済的不平等を改善する効果を持つと長年にわたって期待されてきた。しかし、人口のごく一部が生産性の高い財を保有すると同時に市場が所得を不平等に分配する社会、すなわち「資本主義 [社会]」においては、このような期待は望みが薄いだろう。選挙の最大の価値とは、少なくともいくつかの条件が揃えば、社会で紛争が起こった場合にある程度^{ある}の自由をともなう平和裡にそれを解決でき、暴力による紛争の解決を防ぐことである。私にとっては、これだけで選挙を大切なものだと思うに十分な価値である。

これは、ミニマリストの考え方である。選挙が清廉ではないこと、「公正」では決していないこと、社会が直面する問題に対して無力な場合もあることを認める見方である。そして、選挙が実施されるようになった際にもたれていた、また一部の人がいまだに抱いている理想を実現するのはほぼ無理であることを認める見方でもある。しかし、統治する者を選ぶにあたり、㉕選挙よりもましな方法はないと私は考えている。すべての人の政治参加が個々人にとって効果的なものになるような政治システムはない。政府を市民の完璧な代理人にできる政治システムはない。現代において、多くの人びとが満足できる程度の経済的平等を実現し、それを維持できる政治システムはない。そして、社会的秩序の維持と私権の保護を両立することは容易ではないが、民主主義以外の政治システムでは、その両立はさらに困難である。それがいかなる形や方法であっても、政治が社会を変えるには限界がある。これは、揺るぎない事実である。どんな政治システムでも達成できないことを選挙が達成できないからと選挙を批判しないために、これらの点を知っておくことは重要だと私は考える。しかし、このことは現状に甘んじようという意味ではない。問題の所在を理解することは、私たちの注意

をこれらの問題に向けるのに役立ち、実現可能な改革の方向性を明らかにする。問題がどこにあるのかを正確に特定することは簡単ではないし、また既得権益に妨害されて多くの場合改革が実現しないことも理解している。しかし、限界と可能性の両方を知ることが行動への有用な手引きであろう。結局のところ選挙とは、ある程度平等で、知識があり、自由な人びとが、それぞれのビジョン、価値観、利益に従って、社会をより良いものにするため平和裡に闘うことを可能にする枠組みにすぎないのである。

競合的な選挙、すなわち、有権者の過半数が望んだときに現職が負ける選挙は、人類の歴史においては非常に短い期間しか存在していない。クーデタと内戦という武力の行使による権限獲得のほうが長い歴史をもち、また貧しい国では依然としてそれが起こっている。1788年から2008年の期間、選挙で政府が代わったのは544回、クーデタで代わったのは577回であった。選挙で政府を選択するという理念そのものはごく最近のものであり、定着しているとはまだいえない。歴史上初めてすべての成年男子が選挙権を持って任期付きの代表を選ぶ国政レベルの選挙が実施されたのは、1788年であった。歴史上初めて選挙で政権交代が実現したのは1801年であった。どちらもアメリカでの出来事である。それ以降、世界では約3000回の国政レベルの選挙が実施されている。しかし、現職が選挙で負けることは近年になるまで稀であり、平和な政府の交代はさらに稀であった。現職が負けるのは5回に1回であり、平和な政権交代の頻度はさらに低い。それでも、2008年の時点で、中国とロシアの二つの大国を含む68カ国では、選挙の結果として政権交代が起こったことはない。

ある選挙での敗者の視点から状況を検証してみよう。彼らは力づくで権力を掌握するために暴力に立ち戻るか、負けたコストを受け入れて次回の選挙で勝つのを待つか、いずれかの選択に迫られている。敗者の選択は、暴力に訴えた際に勝つ可能性、暴力的に争う場合のコスト、敗者として支配されることにともなう損失、そして次回勝利する可能性に依存する。彼らの選択はどちらにもなる可能性があるが、勝者がとる政策が極端でない限り、あるいは次の機会に勝つチャンスが十分にある限り、彼らは次の機会を待つことにするだろう。

一方で勝者は、敗者が武力に訴えるのを防ぐためには、政策を穏健にしなければならないこと、また、現在の敗者が将来的に勝てる可能性を潰すように現職の優位性を乱用すべきでないことを知っている。選挙による紛争の処理は、相手側も同じように

行動するという条件のもとでは、平和裡にチャンスを待つのがそれぞれにとって最良の選択であるという状況を生み出す。流血は、政権交代が期待できるという事実だけで回避される。

2000年のアメリカの大統領選挙を考えてみよう。投票に行った有権者のほぼ半数にのぼる人びとは、この選挙結果に失望していた。しかし彼らは、2004年には勝てる機会が来るであろうことを知っていた。そして2004年を迎え、選挙結果は疑う余地のない負けだったので、さらに失望した。それでも彼らは2008年に期待していた。そして、ジョージ・W・ブッシュとディック・チェイニーを選出し、さらに再選させた国で、2008年にバラク・オバマが選ばれると誰が予想しただろうか。アメリカ人の大多数が、4年後の敗北を期待してドナルド・トランプの勝利を受け入れたのも、これと同じである。

投票とは、意志の上に意志を重ねることである。つまり、投票によって決定が下される場合、自分とは異なる意見を持つ人や、自分の利益に反する決定に従わなければならない人が生じる。投票は勝者と敗者を生み出し、たとえ制約の範囲内であったとしても、勝者が彼らの意志を敗者に押しつけることを正当化する。投票による決定とは、そうでない場合と比べ、どのような違いがあるのだろうか。

私は、投票はルール遵守をもたらすと考えている。投票は「力こぶをつくること」と同じ、つまり、起こりうる戦争の勝率を予測できることに匹敵する。もし、すべての人間が同じ強さ、あるいは同じ程度に武装しているのであれば、投票分布は紛争の結果の近似値である。もちろん、戦う能力が専門的かつ技術的になり、いったん物理的な力が単なる数の力から乖離^{かいり}すると、もはや投票から暴力をとまなう争いの勝率を読むことはできない。しかしながら、投票からは、人びとの持つ情熱や価値観、利益に関する情報が明らかになる。もし選挙が反乱の代わりにおこなわれる平和的な行為であるとするならば、選挙は、誰が何に対して反乱を起こすだろうかを全員に知らせる役割を持つ。選挙は敗者に対し、「これが力の分布である。選挙の結果が伝える指示に従わなければ、暴力的な対決で私を倒す可能性よりも、私がお前に打ち勝つ可能性のほうが高いだろう」と知らせ、また、勝者には、「次の選挙をおこなわなかったり、過度な収奪をしたりすれば、お前に最大限の抵抗を仕掛けるだろう」と伝えているのだ。

選挙は、現職が圧倒的に有利な立場を享受していても、対立する政治勢力が最終的に暴力的な抵抗をおこなう可能性についてのある程度の情報を提供する。支配者（個人、政党、派閥）が選挙ではなく力づくで権力を掌握した体制において、選挙をまったくおこなわない場合には、彼らが力づくで排除されるまで、その支配は平均 20 年続くという分析結果がある。支配者が野党を許容しないながらも選挙をおこなっている場合には、25 年継続する。また、ある程度競合的な選挙をおこなった場合には、クーデタやその他の暴力的な政権奪取まで 46 年かかる。これに対し、選挙で少なくともいちどは平和的な政権交代を経験した場合には、暴力的な政権奪取は 87 年にいちど起こるだけである。したがって、選挙をおこなうというだけでも暴力的な紛争の頻度を減少させ、それほど競合的ではなくとも野党が存在する選挙では頻度はさらに減少し、実質的に競合的な選挙は、暴力的な紛争の頻度をほぼゼロにする。選挙は、支配の限界を明らかにすることで政治的暴力を減らすのである。

結局、民主主義の奇跡とは、対立する政治勢力が投票結果に従うということである。銃を持っている人が、持っていない人に従う。現職は、選挙により野党に政権の座を奪われるリスクを負う。敗者は、政権を獲得するチャンスを待つ。紛争は規制され、ルールに従って処理されるため、限定的になる。これは合意とはいえないが、暴力的ではない。いわばルールのある紛争、すなわち殺戮^{きつりく}のない紛争である。投票用紙とは「紙でできた石つぶて」なのである。

（アダム・プシェヴォスキ 著、粕谷祐子・山田安珠 訳『それでも選挙に行く理由』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。）

問題 1 筆者が下線部⑥「選挙よりもましな方法はない」のように考える理由について、課題文を要約しながら説明しなさい。（390 字以内）（75 点）

問題 2 筆者の下線部⑦「選挙を通じて合理性や「正義」を求めるのは無意味である」という主張に対するあなたの賛否を明らかにし、その理由を複数挙げて、説明しなさい。（440 字以内）（75 点）